芳泉中発未来へ

「生きる力」を育む教育をめざして

No.13
平成31年1月11日
芳泉中学校
学校だより編集部

あけましておめでとうございます
今年もよろしくお願いします
自らの力で納得のいく一年間に！

いよいよ「平成」という元号（げんごう）を使う最後の年がスタートしました。四月一日には新しい元号が公表されるということですが、生徒の皆さんは是非とも、自らの力で納得のいく一年間を作り上げてほしいと思います。

今年を過ごしてほしいというものでした。

もう一つは、昨秋に行った教育に関する総合調査における生徒のアンケートの内容についてのフィードバックでした。アンケートに寄せられた生徒の声としては教育環境面の整備に関する要望が多かったことに触れながら、その具体的な内容として、「教室のエアコン設置」については今年の夏には各教室にエアコンが整備される予定であること、「大型テレビの充実」については、年度ごとに予算を組んで大画面テレビを順次増やしていることを話されました。

また、どのクラスからも、「校則やマナーをきちんと守る学校にしていきたい」、「いじめのない学校にしたい」、「気持ちのよい挨拶のできる学校にしたい」という声がアンケートの中に挙げられていたことにも触れて、生徒の皆さんが力を合わせてそうした学校を作り上げていきましょうと呼びかけられました。

終業式の校長講話はスライドとの併用でビジュアルに

自分の可能性を閉ざすことなく、仲間と支え合って成長を
・・・山﨑校長の始業式講話より

一月七日（月）には三学期の始業式が行われ、山﨑校長から生徒に対して講話がありました。

そこで話された内容は大きく分けて二つあり、一つは昨年秋に「てっぺん」の大嶋啓介さんから教えていただいたこと、つまり、「できない」というのは自分の思い込みであって、自分の可能性は無限に広がっていること、仲間の支えがあってこそ力が発揮できること、誰かのために頑張る、誰かに喜んでもらうために頑張ることは自分の夢をかなえる大きな力につながること――これらを忘れずに

始業式の校長講話を真剣に聞く第一学年の生徒たち

終業式の校長講話にも成長のための重要なヒントがありました

終業式の様子については紙面作成の都合から二学期最後の「学校だより」でお伝えすることができませんでしたが、学力の向上について、山﨑校長からとても大切な内容の講話がありました。生徒の皆さんはそう言われて内容を思い出せるでしょうか。

大嶋啓介さんの言うように「可能性に蓋（ふた）をしない限り人の成長する可能性は無限にある」わけですから、その可能性に向かって自分の力で出発した人は自分にとって悔いのない成果や到達点を得ることができます。そうした人が、納得した成果を獲得した時点で自分を振り返ったときに、「何が自分を成功させたかという要因をどう考えているのか」、あるいは、過去の自分と同じくこれから頑張ろう！というスタート地点に立っている若者を見たときに「その若者が将来自ら望む成果を得ることができるかどうかをどのような観点から見極めているか」ということに生徒の皆さんは興味はありませんか。

学校関係者の間でも、「難関大学に合格するだけの高い学力・学習習慣を中学生の時から身に付けることができた生徒」、「全体の学力を伸ばすことができた学級集団」の特徴などを振り返って議論することがありますが、山﨑校長が講演を聞いた勢いのある会社の経営者が大切と考える「学びの要素」には、そこでの議論と同様のものがありました。

集中力・継続力・判断力が成功へのキーワード

成功へのキーワードとして講演の中でまず第一にその社長さんが挙げられたのは「**集中力**」でした。学校関係者の間の議論でも同様なことが言えて、たとえば芳泉中の状況とは比較にならないくらい教室が騒がしいなかで、非常に優れた成績を維持していた生徒たちの共通点は、教材に向き合ってからそれに集中するまでの時間が極めて短いことでした。どんなにガヤガヤと騒がしい中でも、プリントが自分の机に配られてからものの五秒も経たないうちにもう周りの雑音は何も耳に入っていないような集中ぶりを見せていました。そのような生徒の中には、駅のホームで読書に集中しすぎて電車を二本も乗り過ごしたというエピソードを持つ女子もいました。

こうした優れた個人的資質を幼児期から習得している生徒もいると思いますが、学校生活の中にも集中力獲得のためのトレーニングに格好の場があります。それは「**朝読書**」の時間です。朝読書が始まってどれだけ短時間で本の内容に集中することができるか、このことで集中力を訓練していくのです。クラス全員が、朝読書の時間を、学力向上に最も大切な集中力を高めるトレーニングの時間という意識を持って取り組むと、今以上に集団としての学力は高まることになるでしょう。このようにして、集中力の高い学びを継続し、判断力を高めていくとそれぞれの生徒自らが願う到達点に近づいていくことになるでしょう。

朝読書での集中力は、難易度を増す入試問題への対応についても重要な意味を持ちます

「思考力・判断力・表現力」が学力の重要な要素ということが学習指導要領で明示されてからというもの、入試問題がどんどん複雑になり難易度が高くなる傾向が現れています。この傾向は、今後しばらくの間は変わることはないと思われます。また、問題文の量も各教科で増えており、「問い」の部分の日本語の文章を読むだけで一苦労という状況や、時間をかければあれこれと試行錯誤しながら解けることは間違いないのだが、実際はそうした時間さえも与えてもらえないような状況に生徒が直面することも多くなっています。こうした「時間不足」になりがちな試験問題への対応について、実は「朝読書」はとても有効な手段なのです。

長文の日本語の文章に含まれる内容や出題の意図を理解するために最も大切なことは、いかに速くその文章をきちんと読むことができるかということです。では、そのためにはどのように朝読書の時間を活用をすればよいのでしょうか。単純な発想だと、速く読む練習をすればよいのではないかと思われますがそうではありません。文章を読むときに、内容がすっと頭の中に入るものとなかなかすっと入ってこないものがあります。たとえば、なじみのない分野についての専門的な文章などの場合、日本語の文字レベルでは理解でき

ているけれども、文章の意味のレベルでは全く分からないものがありますね。このことが示していることは、そのジャンルに関する**背景となる知識の蓄積**がある程度の**背景となる知識の蓄積**がないと日本語の文章を速く読むことはできないということです。

「朝読書」に集中して取り組む生徒の様子　（H31.1.9）

また、文章を早く理解することができる人はその文章のすべての部分を同じ労力をかけて読むということはしていません。ある程度の知識の蓄積がある分野ならば、さっと目を通しながら全体の構文とキーワードが含まれている部分をスキャンするような感覚で文章を読んでいきます。そのスキャナーにかかった部分だけをじっくり読んで文章の中核をとらえるという作業を行っているのです。

このようなスキルを獲得する上で重要なことは、文章の書き手の構文の枠組みが読み手の中にあらかじめ取り込まれているということです。したがって、多くの文章をより迅速に理解するためには、**できるだけ多様な書き手の構文の枠組みを頭の中に取り込んでおくこと**が重要になるのです。

書き手の構文の枠組みについては、文学、歴史、科学等、ジャンルによってある程度特徴的、典型的な形がありますから、自分の好きな似通ったジャンルの本ばかりを選ぶのではなく、できるだけ幅広いジャンルの本を選んで集中して読むことが大切です。朝読書は原則として毎日行われていますから、毎日の小さな積み重ねが一年後に大きな力になることを信じて、各クラスで集中モードに入るスピードとセットで真剣に取り組んでほしいと思います。

なお、「朝読書の時間に漫画を読んでもよいですか。」という質問が時々生徒から寄せられますが、文章を読むことによってその構文の枠組みごと頭の中に無意識に取り込まれるという考え方に立つと、漫画には文章の構文が含まれないので、多様な構文の枠組みが無意識に取り込まれるということについては期待できないことになりそうです。

チャレンジ精神とフィールドの拡大は自らの未来を拓くカギ

ところで、新年にあたり生徒の皆さんはどのような決意をしたでしょうか。年末最後の学校だよりでは、「私は‥する。」、「私は‥になる。」という強い意志のこもった自己目標を立てそれを言語化することについての話題を提供しましたが、生徒の皆さんは自己目標を設定することはできたでしょうか。

今回は、チャレンジ精神で自らの進路を切り拓いた生徒の話題を紹介したいと思います。

少し前のことになるのですが、かつて中一の時に担任をした大学四年生になった生徒が突然訪ねてきました。彼は当時から空への仕事に強い興味を持っており、飛行機かエンジニア関係の仕事がしたいという話を教室でしていました。その彼が「先生、とうとうパイロットになる道が開けましたので報告に来ました。」と目を輝かせていうのです。日本の航空会社のパイロットへの道は極めて難しいことは実際にその職に就いている知人の体験談から分かっていたので、「それはおめでとう。よくやったなあ。でもパイロットになるのは超難関だろう。JAL（日本航空）？それともANA（全日空）？」と聞くと、「どちらでもありません。フィリピンの航空会社です。自分は空を飛べればどこの国の航空会社でも関係ないです。日系の会社からパイロットになるのは確かに自分には難しいと思います。」という答えが返ってきました。「なるほど、そういう道があったのか。でも、英語の習得が大変だっただろう。」と尋ねると、大学在学中にフィリピンの中学校の教科書を現地でたくさん入手して、フィリピンという国の勉強と英語の勉強を同時にできるようにしたことなど、自分の夢を果たすために夢中で頑張った様子をとても真剣な表情で楽しそうに話してくれました。

日本という枠の中だけで考えると難しいことでも、世界という枠の中で考えるとチャンスの芽はたくさんあるものです。大学などでは「グローバル人材の育成」というキーワードがさかんに使われるようになっていますが、自分の夢を現実のものにしていくためのフィールドを自らの手で拡大していくことも大切なことと言えるでしょう。

台湾親善交流訪問で見えた台湾の強み・日本の強み
‥日本の長所を生かしたグローバル人材育成の視点とは‥

昨年十二月末に芳泉中学校から十四名の生徒により台湾親善交流訪問を行ったことは「学校だより」の特集号でお伝えしたところですが、実際に台湾を訪問して現地の先生方と交流を行う中で、台湾の強みと日本の強みをあらためて認識させられる場面がありました。

個人の高いパフォーマンスを感じさせる台湾の生徒たち

台湾の生徒との交流活動を通じて感じられたのは、個々の生徒のパフォーマンス（目立たせる振る舞い、才能）の高さとエネルギッシュなコミュニケーション力でした。どのような場でも自分の存在を際立たせるアピール力は、日本人には真似のできないものがあるように思われます。また、スマホの音声翻訳機能を自由自在に操ってなんとか相手とのコミュニケーションを成立させて実を取ろうとする積極的な姿勢も、遠慮がちで初対面の人の前では消極的になってしまいがちな日本の生徒にはない大きな強みだと思われました。

熱気溢れる親日的な光復高級中学・高校の生徒たち

チームで高い成果を上げることに秀でているとされる日本人

一方で、日本の学校にも台湾の先生方を感心させる多くのことがあるようです。まず、何事も時間通りに綿密に実行されること。芳泉中訪問時にも台湾の先生が「やっぱり日本ですねえ」と感心されていました。また、自らテーマを決める探究的な学習が行われていることも台湾の先生には新鮮なことのようでした。

さらに、チームで協力することによって個人で行うよりも高い成果をあげることに非常に秀でていることも日本人に対する優れた評価のようでした。

最近ではとかく個人の力の向上だけに目が向きがちですが、世界の人々が自分たちが持ち合わせていない日本人の素晴らしい「特性」として認めている「協力・協働ということによって新しい次元を切り開いていくことができる力」を教育の中でもますます伸ばし育てていくことが、日本のグローバル人材の育成においては必要であると言えるでしょう。芳泉中でも身近なところからグループで協力して行う活動を今まで以上に大切にしていきましょう。

浦安地区の方から芳泉中生徒の温かい行為へのお礼の言葉が届けられました

新年早々の一月四日（金）浦安地区の住民と名乗られる方から一本の電話がありました。その内容は、「信用金庫の近くでおばあさんが体調を崩して倒れて動けなくなっていたところに、女子生徒二人がやってきて、上着を掛けてあげていた。素晴らしい生徒さんたちですね。ありがとうございました。」というものでした。

始業式の日に学校で先生が事実を確かめると、上着を掛けてあげた2名の二年生の女子生徒の他にも、倒れているおばあさんをだき抱えて上体を起こすことを手伝った一年生の男子生徒がいたことも分かりました。

防災に関する学習などでは、中学生は助けてもらう存在ではなく、幼児やお年寄りを助ける存在としても大切な地域人材であるということが言われていますが、実際にそのような場面でおもいやりのある温かい行為が学年分け隔てなくできるところが芳泉中の生徒の素晴らしさであるといえるでしょう。